



【職場】 石川県
【職業】 放送局員

現在 石川県



赴任国 ベトナム
社会主義共和国



【赴任地】 ハノイ市

【職種】 番組制作

【派遣期間】 2021年9月～2023年9月

世界と地方をメディアで繋ぐ

山本 岳人さん 石川テレビ放送株式会社 社員

Takehito Yamamoto

「隣人」を理解したいという一途な思いから、一躍人気インフルエンサーに。
テレビマン、そして父親として、国境や障害を超えて人々を繋ぐ新たな挑戦を続けている。

石川テレビ放送に勤める山本岳人さんは、同社を休職してJICA海外協力隊（JOCV）に参加した。ベトナムの国营放送局の一つ、VTVで番組制作に従事する傍ら番組の知名度を上げようと始めたTikTokが思わぬ反響を呼ぶ。現地の若者の心を掴み、インフルエンサーとなったテレビマン。その現在の働き方を追うと、これからのメディアと社会の関わり方が見えてきた。

山本さんの現在地

放送波を超えて世界と繋がる「ハブ」へ

石川テレビ放送の社員でありながら、広告代理店やウェブ会社にも籍を置き、さらには50万人のフォロワーを抱えるインフルエンサーとしての顔も持つ。山本さんの名刺に並ぶ四つの肩書きは、一見すると現代的な複業家の姿だが、そ

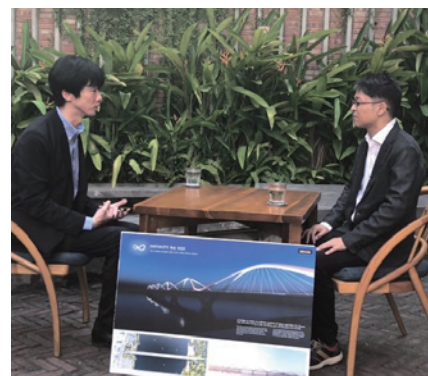
の本質は戦略的な「地方メディア構想」にある。

山本さんは、自身の働き方をコンピューターになぞらえてこう説明する。「石川テレビは自分の原点であり土台。これをOSに例えると、その他の活動はアプリです。OSにいろんなアプリを載せるように、複数の会社に所属することでできることを増やしていきたい」

2005年の入社以来、YouTubeの誕生と共に「テレビはオワコン」と揶揄される時代を歩んできた。その中で養われたのが、従来の放送波という枠に縛られない柔軟な発想だった。「今の時代、地方放送局だって世界に直接情報を届けていくことができます。地方と外部を直接つなぐ『ハブ』のような役割を担いたいと考えています」

山本さんのテレビやSNSに対する捉え方もユニークだ。テレビ番組を「定

食」、SNSを「ビュッフェ」に例えて力説する。「好きなものだけ食べていたら栄養が偏ります。でも、栄養価が高くても、魅力がなければ誰も口にしません。テレビ（バランスを考えて作られた定食）とSNS（魅力的なビュッフェ）の関係も同じなんです」SNSからテレビへ。山本さんの頭の中には、その確かな設計図がある。



ベトナムに在住する石川県出身の建築家をテレビ番組で紹介する



配属先「VTV」の同僚と共に



帰国後もインフルエンサーとしての活動を続けている



帰国後、休みを使って訪問しているAME HOUSEの子どもと

JOCV時代

決意が生んだ50万人超のフォロワー

2021年、コロナ禍が続く中、山本さんはJOCVとしてベトナムへと渡った。当初の選考で得た内定先はタンザニアだったが、山本さんは「石川県で最も多い外国人居住者であるベトナムの人々を肌で理解したい」と辞退。再挑戦でベトナムへの切符を掴み取った。そこには「隣人である彼らのことを何も知らない。それではいけないと思った」という一途な思いがあったのだ。配属先では、番組を盛り上げるためTikTokに目をつけた。「最初は鳴かず飛ばず。フォロワーはわずか30人からのスタートでした」しかし、SNSが持つ囃されるのは、組織の看板よりも先に個の信頼と繋がりがあることを確信した山本さんは、テレビマンとして培った「何が面白いのか」を見抜く勤と編集技術、そして自らが外国人という優位性を活かして、ベトナム語での発信を粘り強く継続。試行錯誤の結果、わずか一年でフォロワーは50万人を突破した。

「現場に行かないと分からないことが

ある。人々が何を喜んでいるのかを肌で感じる。その実体験があるからこそ、広告ではない、生きた情報が発信できるんです」この現場主義こそが、インフルエンサーとしての言葉に重みを与えていく。

未来へのビジョン

誰もが「自分事」で繋がる社会へ

山本さんが描く「地方メディア構想」の先にあるのは、単なる情報の効率化ではない。その根底には、一人の日本人として、そして一人の父親としての願いがある。

現在、山本さんは休日を返上して度々ベトナムへ渡り、自閉症児支援施設「AME HOUSE（アメハウス）」の運営を支えている。自身も自閉症の子どもを持つ父親であり、日本での子育てを通じて、障害がある子どもとその家族が抱える孤独や葛藤を身をもって知っている。「ベトナムでは、障害がある子どもたちの居場所はさらに限られています。でも、親が子どもを思う気持ちに国境はありません」

その想いは、石川とベトナムという二

山本 岳人さん プロフィール

2005年、石川テレビ放送に入社。2021年より休職してJICA海外協力隊に参加し、ベトナムの国営放送局・VTVで番組制作に従事。活動広報として始めたTikTokが話題を呼び、SNSフォロワー50万人超のインフルエンサー「たけそーん」となる。現在は復職し、テレビとSNSを融合させた「地方メディア構想」を掲げ、日本とベトナムの架け橋として多方面で活動中。

つの土地を結ぶ絆にも重なる。2024年、能登半島地震が発生した際、山本さんのSNSにはベトナムの人々から多くの祈りと支援が寄せられた。逆にベトナムが台風被害に見舞われた際も、石川から温かい支援の輪が広がった。こうした共通の課題を通じて、お互いを「自分事」として助け合える仕組みを、メディアの力でインフラ化していきたいと山本さんは話す。

「一人の人間として、誰かの力になれるハブであり続けたい」山本さんの歩みは、メディアの新しいあり方を提示すると同時に、私たちがこれからの多文化共生社会をどう生きるべきかという、大切な問いを投げかけている。

山本さんへのエール！

AME HOUSE
共同運営者

チャン・ヴァン・アインさん



ずっと応援しています！

「隣人」を理解したいという一途な思いでベトナムに飛び込み、今や両国を繋ぐ欠かせない存在となった山本さんを心から誇りに思います。私たちが共に歩む「AME HOUSE」は、障害という垣根を越え、誰もが自分らしくいられる居場所です。これからも、日本とベトナムの架け橋として、子どもたちの未来を一緒に明るく照らしていきましょう。山本さんの情熱が、さらに多くの人の心を動かすハブとなることを確信しています。